

香川県農業・農村審議会議事録

- 1 日 時：平成 27 年 3 月 20 日（金） 午前 10 時～11 時 45 分
- 2 場 所：香川県社会福祉総合センター 7 階 第 2 中会議室
- 3 出席者：片岡会長、大山委員、小比賀委員、香川委員、加藤委員、田中委員、田淵委員、月山委員、佃委員、橋田委員、広野委員、松本委員、三原委員
(会長以外は 50 音順)

4 議 題

- (1) 香川県農業・農村基本計画の進捗状況等について

【議事要旨】

- (1) 香川県農業・農村基本計画の進捗状況等について

事務局から、香川県農業・農村基本計画における取組の成果と課題、国の農政改革の概要、平成 27 年度予算の概要等について説明を行った後、審議を行った。

主な意見は次のとおり。

○委員

昨日（3/19）の四国新聞に「さぬきの夢」に関する広告記事（かがわ農産物流通消費推進協議会）が掲載されていたが、生産農家が何名か紹介されており、わかりやすく、よい宣伝になったと思う。ぜひ、農家の方には「さぬきの夢」の生産を拡大してもらいたい。

→（事務局）

「さぬきの夢」は県の農業試験場が改良を重ねて開発したものであり、実需者から高い評価をいただいている。麦の生産量を増やせるよう、積極的に担い手を支援してまいりたい。

○委員

新規就農者が増えており、よいことではあるが、女性の就農はどのような状況か。また、先日、新聞で「農ガール」という組織の記事を見たが、私もこうした女性の活動を応援したい。

→（事務局）

女性の新規就農は以前より増えている。また、夫婦一緒に就農するケースもあり、女性の視点を活かして経営を発展していけるよう、家族経営協定の締結など、女性の経営参画を推進しているところ。ぜひ委員の皆様にもご支援・ご協力をお願いしたい。

○委員

県の方向性は基本的によいと思う。行政では、伝統的に土地改良事業などのハード事業がどうしても前面に出てしまうものだが、新たな香川県農業・農村基本計画の作成に当たっては、ソフト事業も大切であることに留意してもらいたい。また、消費者が何を望んでいるのかをよく調べ、農家の所得が向上するよう支援してもらいたい。農協等の団体においては、もっと農家の思いを汲み取り、販路開拓に力を入れてもらいたい。

→（事務局）

マーケット・インの考え方を取り入れる必要があると認識しており、現場での意見交換や農政水産部内で勉強会も実施しながら、ブランド農産物の生産拡大や販売方法等について検討し、有利販売に向けた取組を農協へ働きかけているところ。次期計画の策定においても、現場の意見を聞きながら、農家の所得向上に重点を置いて検討してまいりたい。

○委員

ブランド農産物については、消費者の信頼を得るとマーケットの拡大につながる好循環が起り得るので、戦略的に取り組んでももらいたい。

○委員

新規就農者が増えているが、I F K（香川県農業青年グループ）への加入は増えていないので、新規就農者が孤立せず、若手農業者同士が交流できるように、後継者クラブへの加入を促進してもらいたい。また、就農に当たって、農地を借りる際の下限面積 40a が施設野菜など品目によってはネックになるので、見直してもらいたい。鳥獣害についても深刻化しているので、全国の優良事例を紹介してもらいたい。

→（事務局）

以前は、若手農業者の多くが後継者クラブに加入し、よく集まり、切磋琢磨しながら親交を深め、現在の中核的な担い手となり、繋がりを保っていることで、普及センターを通じて新規就農者に I F K への加入を勧めるなど、情報提供してまいりたい。新規就農者の農地の確保について、下限面積は市町が緩和できることになっているので、弾力的に対応するよう市町に働きかけてまいりたい。鳥獣害の優良事例は、県内にも成功事例があり、市町へ紹介・説明しているところであり、優良な取組を県内で横展開してまいりたい。

○委員

機能性食品について、消費者が求めている制度と言われているが、基準はどうなるのか。県ではオリーブ牛の機能性に関する事業があるようだが、生物（生鮮食品）での機能性表示は難しいのではないかと。

また、地産地消を薦めているが、「讃岐コーチン」などのブランド農産物を地元で求めても入手しにくい。ブランド化は売り手（生産者）にとってよいことではあるが、地元の人が地元のブランド農産物を利用できる体制も整備してもらいたい。

→（事務局）

ブランド化においては、機能性成分を定量的に説明できることと、一流シェフや市場関係者の評価など定性的な評価の2つが揃っていることが重要。定量的に説明する機能性成分については、統一した生産工程管理など、ばらつきを抑えるための一定の基準が必要ではないかと考えている。

また、「讃岐コーチン」は食べた人の評価はよいが、価格が高いことから販売が伸び悩み、近年は生産量が停滞している状況。現在、オリーブを活用した新たなブランド畜産物の研究開発を進めている。

○委員

機能性については、県産品で謳えるものとなっているのか、大学も含めて研究を進めていく必要がある。

○委員

「オリーブ牛」は最近、よく店頭で見かけるようになり、利用頻度が高まったと感じている。オリーブを活用した他の畜産物の開発についても期待する。「おいでまい」についても美味しいとの声をよく聞くが、県外の家族・知り合いに玄米で送りたいとの声もあるので、玄米で販売しているところがあれば教えてもらいたい。

→（事務局）

農協では、品質を維持するために「おいでまい」を篩いにかけて精米してから販売している。玄米を希望するのであれば、生産者から直接買い入れるか、産直施設で販売しているものを購入していただきたい。

○委員

「おいでまい」の品質維持のために制約があるとは思いますが、田淵委員のご意見のように、県民にそのようなニーズがあるのであれば、それを取り入れてもらいたい。大都市に向けたブ

ランド化だけでなく、地元の方にも歓迎されるブランド化をお願いしたい。

○委員

きめ細かい対応について検討をお願いします。

○委員

近年、気候が大きく変わってきていると感じるので、次期計画の作成に向けて、気候変動への対応についても検討をお願いしたい。また、新規就農者が増えてはいるが、国の農政改革により、今後小規模農家が淘汰されると思うので、そうした環境変化にも対応した計画づくりをお願いします。

→（事務局）

気候変動への対応については、試験場でも念頭に入れて試験研究を進めているが、将来を見据え、技術的にカバーできることを考えていきたい。また、個々の農家が農業により利潤を上げて生活が成り立たなければ、農業は持続していかないので、新規就農者をサポートして中核となる担い手へと育成し、農地を集積していくとともに、こうした大規模経営体だけでは香川の農地を守れないと考えられることから、地域での集落営農の組織化を並行して進めているところであるので、小規模農家の方には、リタイアするのではなく、集落営農組織への参画を促してまいりたい。

「以上」